国際研究論叢　30（3）：33～52，2017

夏目漱石と藤代素人
―『吾輩ハ猫デアル』を巡って―

鎌　野　多美子*

Soseki Natsume and Sojin Fujishiro
― About *Wagahai wa Neko de Aru* ―

Tamiko Kamano*

Abstract

This paper examines an article by Sojin Fujishiro, *The Heated Record of a Cat Writer*, and *I Am a Cat* by Soseki Natsume. The *Cat Writer* says that Natsume's cat is borrowed from Germany. The author of the *Cat Writer* is Teisuke Fujishiro, who revealed the hidden name of Murr the tomcat, popular in the German literary world.

Fujishiro and Natsume were friends. Through national scholarships, one studied in the U.K, the other in Germany.

In addition, it is said that Natsume's cat does not clarify the name of the German cat. This article covers both *I Am a Cat*, and how Natsume answers the attack of the *Cat Writer*.

キーワード

吾輩、夏目の猫、ホフマン、カーテル・ムル、猫文士、素人

一　序論

夏目金之助は知らなくても、夏目漱石を知らない日本人はいないであろう。かつて千円札の顔だった（一九八九－二〇〇七年）からだけではない。

『吾輩ハ猫デアル』でデビュー、その後数多くの名作を世に送り出した漱石は、慶応三年一月五日（一八六七年二月九日[1]）武蔵国牛込馬場下横町（現在の東京都新宿区喜久井町）に生まれ、大正五年（一九一六年）一二月九日四十九歳と十ヶ月を以て、連載中の小説『明暗[2]』を遺して世を去った。死因は、すでに夏目の猫が断言している通り、胃病だった[3]。

＊かまの　たみこ：大阪国際大学現代社会学部教授〈2016.12.2受理〉

二〇一六年は夏目漱石が世を去ってから百年、二〇一七年は誕生してから百五十年目にあたる。そこで漱石がイギリス留学体験後に執筆した『吾輩ハ猫デアル[4]』を観察しようという気分に誘われた。

漱石の処女作品は、ビールに酔っ払った主人公の溺死により終るという見方が正統派の伝統的な読み方であるが、そうでもなさそうである。吾輩はどうやら著者の都合で突然死させられた気配があるので、この小論文では伝統的な見方から離れ、新しい見方で夏目の猫を観察してみることにする。

二　漱石にかかる疑惑

今日では我が国の文豪夏目漱石の処女作品『吾輩ハ猫デアル』の主人公がどこかからの、誰かからの借り物だとは決して誰も考えない。思いもつかない。

しかし、吾輩の誕生から二年も経たぬ間に、漱石とは一九〇〇（明治三三）年に同じ船でヨーロッパへ留学し[5]、またその留学の期限である満二年が終了する一ヶ月前に、重度の神経衰弱を患っていた「夏目ヲ保護シテ帰朝セラルベシ[6]」と云う電命を、文部省から受けた間柄でもある藤代禎輔が、雑誌『新小説[7]』の中で、夏目の猫は借り物だと主張した。

藤代の専門分野がドイツ文学なので、ドイツ－ロマン派作家エルンスト・テオドール・アマデウス・ホフマン[8]のカーテル・ムルを、英文学者漱石に先取りされたのが気に障ったのか、あるいは独文学者であるからこそ黙認できなかったのか、その真意は定かではないが、彼は人気絶頂の真只中の夏目の猫に異論を唱えた。

吾輩を、あたかも自分固有の猫であるかのように叙述する著者に対して、禎輔は、吾輩には先駆者のいることを、著者が連載中にどこかの頁で告げるであろうと待ち続けていただけに、何の気配もない事に終に業を煮やして『猫文士気焔録』としてペンネーム素人を以て物申したらしい。

それは、カーテル（Kater / 牡猫）・ムルが口述したものを、筆者となっている素人が筆記したという代物であるが、後世の批評ではなく、『吾輩』執筆中に起った疑惑であるから、執筆者自身それに応えなければならなかった。それゆえ、著者の夏目は吾輩を以て、それに応えた。その反応が実に興味深いので、先ずはその猫文士の気焔ぶりを以下にみていくことにする。

1）猫文士気焔録

この頃日本の文壇で夏目の猫と云ふのが、恐ろしく幅を利かせていると、今は天国に居る吾輩の耳にも聞こえたから、或る方法を以て、其著書を見た所が、表題に「吾輩ハ猫デアル」とあって下のほうに夏目漱石著と出て居る。シテ見ると、猫の名が夏目漱石というのであらう。妙な猫名もあるものだと考えながら中を開けてみると、吾輩は猫である、名前はまだ無い。と、本文の冒頭に書いてある。ハテ變な事もあるものだ。名前の無いものが夏目漱石と名告る譯がない。何かこれには仔細のあることだらうと思って序文を讀んで見ると夏目漱石とは人間の名前で、此名前の持主が猫に假托けて著したものの様に見せ掛

けて居る。けれども吾輩の鋭い眼で看破して見ると、これは人の物を我物顔に済まし込む人間慣用の猾手段であることが見え透いて居る。人間社会では此様な横着手段を「猫ばば」にすると云て居るが、これは我々猫族を見縊った怪しからぬ言葉で聞棄にならぬ。自分共の方が餘程質が悪く出来て居ながら、猫ばばもないものだ。此言葉は以来「人間ばば」と改正するが宜い。其人間ばばをする様な男は吾輩の眼中に無いから、吾輩は矢張り猫を著者と極めて置く。まだ名前がない相だから仮りに夏目の猫と呼ぼう。で、『猫文士気焔録 カーテル ムル口述、素人 筆記[9]』は始まっている。

外題が示しているように、牡猫ムルの言うには、夏目漱石とは人間の名前で、この名前の持主が猫にかこつけて、吾輩を自分が著作したように誤魔化しているが、この誤魔化しは、人の物を我物顔に済まし込む、わるがしこい人間のよく使う手段である。これを人間たちは猫族を侮って猫ばばと言うが、とんでもない、猫の側からすればこの行為は“人間ばば”であると、冒頭から憤懣をぶちまけている。

この造語“人間ばば”には二つの意味が込められている。一つは、牡猫ムルの名を黙っていることで人間社会を批判する猫は自分固有の物であるかのようにみせる、あとの一つは『牡猫ムル』の著者はムルになっているのに、『吾輩ハ猫デアル』の著者は吾輩ではなく夏目漱石となっている事にある。前者は文学史上の指摘、後者は藤代のイロニーである。体裁は、あの世にいる猫文士ムルが地上でノサバッテいる吾輩と自称する猫の著者という人物に対して吐いた気焔である。夏目漱石直接にではなく、同族である夏目の猫に吐いている気焔のように見せかけるところは前述通り素人のイロニーで、ユーモアでもある。素人はムルの口述を筆記しただけという建前である。

猫文士ムルが口述するには、E.T.A. Hoffmannによる出版となっている『牡猫ムルの人生観』(*Lebensansichten des Katers Murr*)は、実は牡猫ムルの自作である。猫の自分がそれを執筆中に、同じ机上にあったホフマンの原稿『楽長ヨハネス・クライスレルの未完の伝記』(*Fragmentarische Biographie des Kapelmeisters Johannes Kreisler*)を、今そこに書き上げた文字のインクを吸取るために、吸取紙として押し付けて使用したために、『楽長ヨハネス・クライスレルの未完の伝記』の原稿の上に『牡猫ムルの人生観』の原稿が写っただけでなく、その時に二種類の原稿は混ざり合ってしまったという[10]。

そのようなこととは露知らず、『楽長ヨハネス・クライスレルの未完の伝記』の著者ホフマンは、机上に横たわっていた二種類の原稿を、そのまま一つのものとして活版所に渡した。ところが活版所もそれに気がつかず、一冊物として印刷してしまったので、『楽長ヨハネス・クライスレルの未完の伝記』だけでなく『牡猫ムルの人生観』もまた、ホフマンの出版物になってしまったという経緯である。

しかしムルは自分の作品の表題に、自分の名“牡猫ムル”をあげたので、『牡猫ムルの人生観』と云えば、誰でも直ぐにムルの著作だと分かる。決して読者はホフマンの著作だとは思わない。そのように賢く細工した自分に比べて、夏目の猫は「大人し過ぎるから行かぬ。自分の著したものをソックリ人間の名前で出版されて、黙っている奴があるものか。猫善しにも程がある[11]」と息巻いているのは、吾輩の著したものを自分の名前で出版した漱石への非難である。猫文士の攻撃の矛先が、著者に直接ではなく、同族仲間の吾輩

という猫に向けられているのは、著者への配慮であろう。とはいえ、即座に、「著作権侵害の談判でも開いて閉口まして遣るが宜い[12]」と吾輩を煽っている。攻撃はすべて確実に夏目漱石に向けられている。

また猫文士が自分の先祖は長靴をはいた牡猫[13]である、猫が文明批評を展開する風刺文学はルートヴィヒ・ティーク[14]からの借り物であると白状しているのに、吾輩は黙秘していると指摘している。というより、非難している。そのうえ、世界文学の知識が足らぬためかも知れぬが、文筆を以って世に立つのは同族中己れが元祖だと云わぬばかりの顔附をして、百年も前に吾輩と云ふ大天才が独逸文壇の相場を狂わした事を、おくびにも出さない[15]と、吾輩が『牡猫ムル』を読んでいないかもしれないことを匂わしながらも、読んでいることを前提として、ムルに対する非礼だと憤慨している。英文学者に世界文学の知識がないと言うのは、それは独文学者の、夏目への腹立ちであろう。

そこで、ほんとうに、猫文士ムルが怒るほどの著作権侵害があるのかどうか、それを以下に観察してみる。

2）口述士ムルの、夏目の猫に対する評価と提言

猫文士は、吾輩を、「人間の弱点に向かって中々奇警な観察を下している、痛快な批評を加えて居る[16]」と高く評価しているだけでなく、猫族の側には文学史とか何かと云うクダラない七面倒臭いものがないから夏目の猫がムルを知らないのも無理はない[17]と理解を示し、著作権の侵害も意図的ではなく、独逸文学に熟知していなかったために生じた事だと好意的な一面を見せている。

猫文士は、夏目の猫に先駆者ムルの存在を知らせて遣りたいが、あの世にいるのでそれができないので、夢で知らせようと何度も試みた。けれども、吾輩にはムルのように夢を見る能力がなく、失敗に終ったという[18]。

それでも猫文士は「日本にも独逸文学で飯を食っている人間が幾らもあると云うから、吾輩の紹介をする奴も一人や半分は屹度あるだろう[19]」と、ムルの出身地ドイツ文学界から誰かが自分の存在を暴露するのを待っていたが、誰も何もしないので、焦れったくなり、正月二日に素人が夢を見ている時、その中に立ってみた[20]。素人は実行に移すまでには時間はかかったものの、ムルの口述を筆記することになった[21]という経緯であるが、素人とは藤代禎輔のことで、牡猫ムルの存在を知らない日本人読者に、夏目の猫には先駆者がいたことを知らせようというものである。

猫文士は自分の存在をはっきりさせるために、夏目の猫と自分を比較し、その類似性を指摘しながらも、その詩的天分と夢想性を以てムルに軍配を挙げている。また独逸文学界のモノだけあって、『楽長ヨハネス・クライスレルの未完の伝記』と『牡猫ムルの人生観』が出版時に一つの物として入れ混ざって印刷されてしまったので、原本は読み難いということも報告している。

しかし、読み難いのは二種の原稿が混在しているという理由からだけでなく、ホフマン特有の世界と現実世界が同じ空間同じ次元で混在することにも一因する。それが、百年も前にムルと云う大天才がドイツ文壇の相場を狂わした［脚注15参照］ドイツ・ロマン派の

新世界なのであるが、当時のドイツ文学界では遺憾ながらホフマンは狂気的で不健康な通俗作家の地位に甘んじなければならなかった。ドイツの文豪ゲーテが病的としてホフマンを認めなかったためである。

三　吾輩の反応

猫文士ムルの大気焔を浴びて、いったい吾輩はどのように反応したのであろうか。それは、先ずは吃驚した。猫と生まれて人の世に住む事もはや二年越しになる[22]という描写は、吾輩が『ホトトギス』に初登場したのが一九〇五年一月、猫文士気焔録が『新小説』に出たのが一九〇六年五月、そして終りを遂げるのが一九〇六年八月ということを含んでいる。

そのあとに続く「自分ではこれ程の見識家はまたとあるまいと思うていたが、先達てカーテル・ムルと云う見ず知らずの同族が突然大気焔を揚げたので、一寸吃驚した。よくよく聞いてみたら、実は百年前に死んだのだが、不図した好奇心からわざと幽霊になって吾輩を驚かせる為に、遠い冥土から出張したのだそうだ[23]」という文言によって、見識家の自分でも、カーテル・ムルを知らなかったと断言している。夏目の猫が“見識家”というのは、猫文士の吐いた「世界文学の知識が足らぬためかも知れぬが」［脚注15参照］に対抗したものであると推測する。

“百年前に死んだ”を以て、E.T.A.ホフマンの牡猫ムルを指しているので、“見ず知らず”すなわち“一面識もない”（広辞苑 五版）と言うのは、原語では読んでいないので本物ムルは知らないという事か。

たしかに、原作は二種の長編物が入り混じるだけでなく、文体もホフマン特有でややこしい。ドイツ語と英語はインド=ヨーロッパ語族の、それも西ゲルマン語という、同族言語ではあるが、ロマン派ホフマンの文体は、感覚的表現が多く、また一文章も長く、理解するにはどこが尾やら尻尾やらの難解物である。ドイツもイギリスも地理的には近い、言語的にも遠くはないが、作家の使用する言語はまったくの別物である。こうなると確かに原語で読むのは至難の業ともいえる。したがって、漱石は、ドイツ語では、ムルを読んでいないかも知れない。

しかし、本物は知らずとも、英訳物は知っている可能性は多分にある。文部省からの経済支援が少額だったことも手伝って、漱石は、留学先の大学の講義内容は高額な授業料を支払うだけの値打ちはないといって、講義に出席せず、もっぱら書籍を購入して自室で読書していたというから[24]、この時期に『牡猫ムル』の英訳物を読んだ可能性がある。しかも、漱石が留学した十九世紀のヨーロッパ、特に英仏独の文学は、世界文学[25]というゲーテの造語で特徴づけられるように、活発な交流があり、翻訳も頻繁に行われていたので、その果実はイギリスにも豊富にあったと思われる。

世界文学の交流の果実、それを以下で見てみよう。

四　ドイツ文学のイギリスへの伝播

十九世紀の欧州文学はノヴェレNovelle（散文小説）の時代だった。これは当時の翻訳

文学にも如実に表れている。世界文学の傾向もあり、特にドイツではロマン派作家ぞろいだったので、イギリス人作家はドイツ・ロマン派文学を翻訳する傾向にあり、ハインリヒ・フォン・クライスト[26] やエー・テー・アー・ホフマン、それ以外の作家ではゴットフリート・ケラー[27]やテオドール・シュトルム[28]の散文小説が好んで翻訳された。

ホフマンの作品を最初に翻訳した作家はローベルト・ピエルス・ギリス[29]で、彼は早くも一八二四年にホフマンの*Elexiere des Teufels*（1816）を、続いて一八二六年に*Germann Stories*（独逸小説）の中で他の短編物や*Das Fräulein von Scuderi*（1820）を英訳した。それは一八二八年にはフランス語にも翻訳された。本国ドイツでは当時はまだ重鎮ゲーテが文学界を牛耳って居り、ホフマン文学を病的として遠ざけたので、ホフマンは本国では高い評価を得ることができず、通俗作家の地位に甘んじた。しかし本国とは反対に、彼は外国では人気があった。

イギリスで本格的にホフマンの知名度が上がったのは*Forein Qualterly Review*[30]（1827）の中でホフマンを紹介したスコットランド人のロマン主義作家ワルター・スコット[31]の随筆の功績による。

同時期に、ゲーテから高く評価されていたイギリス人トーマス・カーライル[32]は*Der goldne Topf*を英語に翻訳した。その英訳本*The Golder Pot*の序論で、カーライルはゲーテと同じように、ホフマンは病的で不健全の作家であると述べたが、イギリスではそのような否定的な批評など物ともされず、ホフマンの短編小説*Der Sandmann*（1816）は一八八四年にオクスフォード大学作品集に採り入れられた。それ以外の翻訳物も、暗闇の面をあらわすシャウアー・ロマンティク（怪奇ロマン派）として、十九世紀を通してジミラーSimilar社から何度も出版された。

また、ホフマン自身が描いたテキスト中の挿絵も静かに伝播していった。絶対的に人気のあった*Nußknacker und Mausekönig*（1819）が英訳された（*Nutcracker and Mouse King*）のは一八五三年が初めてであるが、それ以降は、何度も英訳されている。*Nußknacker*の仏訳は一八四四年に出現している[33]。しかし、ホフマンのこの作品名が世界的に有名になったのは、何といってもチャイコフスキー[34]のバレエ曲による（この仏訳を、チャイコフスキーは読んだらしい）。

一八八〇年におけるイギリスとアメリカでのホフマンの名声は、小説作品集（二巻）を出版させるまでに至った。一八一九年から一八二一年に作成されたホフマンの*Die Serapionsbrüder*は、大西洋を挟んで、西のアメリカ合衆国では、ジョン・トーマス・ビールバイ[35]が英訳して*Weird Tales*（気味の悪い小説）になり、イギリスでは、アレクサンダー・エルヴィン[36]が英訳して*Serapion Brethren*になった。一八八一年二月にはパリのオペラ＝コミック座で*Les Contes d'Hoffmann*（ホフマン物語）が初演された[37]。

『吾輩ハ猫デアル』に影響を与えたホフマン晩年の作品*Lebensansichten des Katers Murr*（『牡猫ムルの人生観』）も英訳されて*Kater Murr*となり、*Prinzessin Brambilla*は*Princess Brambilla*、*Klein Zaches genannt Zinnober* は*Kleinzack*、そして*Meister Floh*は*Master Floh*となった。

*Lebensansichten des Katers Murr*は、アスコット・ロバート・モンクリエフ[38]が

一八八三年に英訳しているらしいが、この時のタイトルは筆者の資料収集能力の不足も伴って、定かではない。しかし、子供向けとしては、*The educated Cat*として一八九二年に出版されている。子供向けだからタイトルには*Lebensansichten*（人生観）は省略されている。

ノヴェレ（散文小説）だけでなく、十九世紀はロマーンRoman（物語）の時代でもあり、大御所にゲーテがいた。とはいえ、ゲーテは時代が既に古典主義からロマン主義に変化しているのを察知していたので、ファウスト二部も、エッカーマンのゲーテとの対話も、自分の死後に世に出すようにと伝言した。ゲーテの弟子ともいわれ、ゲーテ自身もドイツ人以上にドイツ文学を理解していると高く評価したイギリス人トーマス・カーライルはシラー伝記を書き、ゲーテ作品を翻訳しただけでなく、ホフマンを病的と評価したにもかかわらず、ホフマン作品を翻訳して、ドイツ文学をイギリスに紹介した。

そのようにして、ホフマンはフランスやイギリスやロシアというように外国で人気を博し、文学や音楽の世界に大きな影響を及ぼした。ホフマンのシャウアー・ロマンティク（怪奇ロマン派）はアメリカ合衆国の小説家エドガー・アラン・ポー[39]にも影響を及ぼし、そのポーからは、明治時代と大正時代に、多くの日本人作家が影響を受けたことも周知のとおりである。

1）牡猫ムルはイギリスにいた

前述通り、漱石が到着した一九〇〇年のイギリスには、すでにホフマンの牡猫ムルの英訳物は存在していた。藤代が「成る程君の部屋には留學生としてはよくもこんなに買集めたものだと思う程書籍が多い[40]」と言っているように、漱石は留学中に沢山の書籍を買い集めていたので、ムルの英訳も読んでいる可能性は高い。読んでいても不思議なことではない。

猫文士の気焔を受けて吾輩は、先ずは、ムルなんぞ見ず知らずだと突き返した。しかし、その舌の根の乾かぬうちに「この猫は母と対面するとき、挨拶のしるしとして、一匹の肴を咥えて出掛けたところ、途中でとうとう我慢がし切れなくなって、自分で食ってしまったと云う程の不孝ものだけあって、才気も中々人間に負けぬ程で、ある時などは詩を作って主人を驚かした事もあるそうだ[41]」と言っている。あるそうだとは、直接は知らぬが誰かが言っているという伝え聞きの響きを読者に与えはするけれど、母親に持っていこうと口に咥えていた肴一匹を自分の欲求に耐え切れず食ってしまったという経緯を、詳細に述べている。さすがに、鰊の頭とまでは言ってはいないが。

白を切る気か、バレルことが分かってのことか、それともボロを出してしまったのか。もちろん漱石の技法であるのは間違いない。バレルこと、バレタことは、承知の上である。みずから進んでバラシテイルとも思える。

藤代の猫文士は、自分すなわちムルと母親との対面について一言も喋っていない。それだけでなく、母親への挨拶代りに肴を口に咥えていったことも、その口に咥えた肴を途中で自分が食ってしまったことも、そのようなことは一言も口外していない。どこにも触れていないし、書かれてもいない。これを一体どう解釈すればよいのか。すなわち、吾輩は

牡猫ムルを知っていたことになる。

ドイツ語原文に、母親であるミーナに昨夜の夕食時に残しておいた鰊の頭Heringskopfをもっていこうと口に咥えて彼女のもとへ走ったが途中で抑えがたい欲望に駆り立てられ、自分で食ってしまったことが書かれている[42]ように、それを忠実に英訳しているアスコット・ロバート・モンクリエフの*The educated Cat*（1892）の中にも同じ場面がある[43]。ここでも口に咥えていたのは肴であり、ホフマンの原文に忠実に鰊の頭herring's headである。母親の名前も原文通りミーナMinaである。エディンバラで印刷された『The educated Cat』は漱石のイギリス到着時には世に出ていた。これは、『牡猫ムル』の一話・二話・三話を原文通りに翻訳して、子供向けのおはなしにしている。丁度原文もそこまでをムルの誕生、生立ち、そして性格として、挿話の形で描いている。ドイツ語原文では“So schließe ich diese Episode meines Lebens[44]”、邦訳すれば“そのようにして僕の人生のこの挿話は閉じる”となり、英訳では“So closes this episode in my life[45]”となる。一字一句、原文通りに英訳されている。

五　吾輩の身の処し方

最終章において、ムルの存在を知っていたことを告白した著者は吾輩を使って、「こんな豪傑が既に一世紀も前に出現しているなら、吾輩の様な碌でなしはとうに御暇を頂戴して無何有郷に帰臥してもいい筈であった[46]」とへりくだっている。

広辞苑（五版）によれば、無何有郷は“自然のままで、なんらの人為もない楽土”、帰臥は“官職を辞して故郷に帰り静かに暮らすこと”“筈”は“当然のこと”とあるように、このあとすぐの一九〇六（明治三十九）年十二月に、吾輩の著者夏目漱石は千駄木町の家を引き払って、本郷西片町十番地ノ七号に移転し、翌年四月には帝国大学および第一高等学校の講師を辞した。そして東京朝日新聞社に入社した。そうなると、もともと漱石は教師という職業を好まなかったとはいえ、職を辞する直接の引導を禎輔が渡したことになる。

バレテやけくそになってか、バラシテ気がラクになってか、主人の苦沙弥こと夏目はいずれそのうち胃病で死ぬ［脚注３参照］と嘯くだけでなく、「死ぬのが万物の定業で、生きていてもあんまり役に立たないなら、早く死ぬだけ賢いかも知れない[47]」とも言う。“万物”というのだから、そこには猫も人間も含まれている。そして、「諸先生の説に従えば人間の運命は自殺に帰するそうだ。油断をすると猫もそんな窮屈な世に生まれなくてはならなくなる。恐るべき事だ。何だか気がくさくさして来た[48]」と吾輩に胸の内を吐露させている。人間の運命は最終的に自殺におちつくというような、そんな窮屈でゆとりのない、気儘勝手にできない人間社会に、注意を怠った著者が、吾輩を誕生させてしまった結果、猫の心は弱くなり、この現実にはかなわないと憂うつになってきたのである。

著者は吾輩に、無何有郷に帰臥してもいいと言わせはしてみたが、この時点ではまだ、ウップンを晴らすために苦沙弥の客人である「三平君のビールでも飲んでちと景気付けてやろう[49]」と今しばらくの猶予を吾輩に与えている。が、諸先生の説に従って、吾輩の運命も行きつくところは自殺でおちつくと予告めいてもいる。

元来酒は飲めない苦沙弥[50]の猫であるから、どうやら苦沙弥、つまり夏目に似て、吾輩もビールは好きでなさそうである。しかし、日本酒ではなく、なぜビールなのだろうかと、つい聞いてもみたくなる。“ビール”を以てドイツを指しているのか。素人の専門ドイツ文学の本場ドイツのビールなんぞ、「唇をつけぬ先から既に寒くて飲みたくもない[51]」と吾輩は言うが、これが『気焔録』に対する夏目の本音であろう。しかし、吾輩に気を取り直させて、「ものは試しだ。（中略）どうせいつ死ぬかしれぬ命だ[52]」と、半ば捨鉢になりながらも、「何でも命のあるうちにして置く事だ[53]（中略）思い切って飲んでみろ」と自分を奮い立たせて、ビールに舌を突っ込み、勢いよく、すすり始めさせるという見せ場を作っている。

しかし、見せ場は作ったものの、これは大変だと一度は出した舌を引っ込めてみた[54]のは、引っ込めさせたのは、又、どうしても猫とビールは性が合わない[55]というのは、著者の躊躇いである。著者の優柔不断、吾輩の生への未練である。けれども又考え直した。「人間は口癖の様に良薬口に苦しと言って風邪などひくと、顔をしかめて変なものを飲む。飲むから癒るのか、癒るのに飲むのか（中略）この問題をビールで解決してやろう[56]」と吾輩に思い直させた。

そこで、ビールをクスリと思えば、良薬口に苦しで、顔をしかめながらでも、飲めばくさくさした気分は治ると考えた。それゆえ、「三平などはあれを飲んでから、真赤になって、熱苦しい息遣いをした[57]」のは、それは飲んだ薬、ビールの効能であって、「猫だって飲めば陽気にならん事もあるまい[58]」と思い、我慢に我慢を重ねて、ようやく一杯のビールを飲み干した[59]とある。始めの一杯を飲むのには、あれやこれやと多くの台詞を言わせて、見せ場を作った夏目は、ビール一杯の量では吾輩は酔うところまではいかない事をよく分かっているのである。とはいえ、戸惑いながら、やっとのことで飲み干すという、この一杯のビールは、それはまもなく起る出来事への序奏なのである。

一杯目の時はあれほど能書きを並べ立てたのに、又、続けざまに二杯目を飲ませてしまえば吾輩は酔ってしまうと分かっているのに、著者は吾輩に一気に二杯目を飲ませた。それだけでなく、零れ落ちていたビールまで舐め切らせた。吾輩が腹に収めたビールの量は、苦沙弥先生がビールの徳利に入っていた味醂を盗み飲みした量とほぼ同量になる[60]。その程度の量で、吾輩の主人の苦沙弥の体は固くなった。したがって二杯目を飲めば、飲んでしまえば、猫の体の行動の自由は利かなくなるのは分かり切っている。そうなれば失態を犯しても不思議はない。正に、そのようにして失態が生じても、誰も何も不思議がらないし、疑惑も抱かない状況を、著者は作った。御膳立てしたのである。どのような失態かは、夏目の猫には分からなくても、著者には十分に分かっている。

吾輩はどうしても死ななければならないので――その理由は黙秘されているが――著者にとっての大事は、吾輩を如何に“独創的”に死なせるか、吾輩の死に方をどのようにするかである。

だから、藪から棒に、著者は、死ぬことを、回避できない第一の事実として、その死に方を、第二の問題とする。それは苦沙弥の言葉では、「どうしても死ななければならん事が分明になった時に第二の問題が起る[61]」である。そしてここで唐突に、苦沙弥は、自

殺志願者の異常心理を描いた短編小説『自殺クラブ[62]』を引き合いに出し、第二の問題つまり死に方は、その自殺クラブと運命的に繋がれているという。「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよかろう。これが第二の問題である。自殺クラブはこの第二の問題と共に起るべき運命を共有している[63]」と言うのである。そして、そこから一気に著者は苦沙弥に「死ぬ事は苦しい。然し死ぬ事が出来なければ猶苦しい。神経衰弱の国民には生きている事が死ぬより甚しき苦痛である[64]」と言わせて、すなわち死ぬことより生きることのほうが苦しいと能書きを並べ、気焔に反撃する代りに、問題の種である猫、つまり吾輩に消えてもらおうと企むのである。神経衰弱の国民とは夏目自身のことで、そのような自分には、これ以上知らぬ顔して吾輩を存続させることは到底できないという事である。

「従って死を苦にする。死ぬのが厭だから苦にするのではない、どうして死ぬのが一番よかろうかと心配するのである[65]」と苦沙弥先生が言うように、夏目は吾輩の終らせ方、それも最善の方法を思案中ということである。吾輩を終了させることに異論はないけれど、著者としてどのように終らせようかと心配しているというのである。

そして「只大抵のものは智慧が足りないから自然のままに放擲して置くうちに、世間がいじめ殺してくれる。然し一癖あるものは世間からなし崩しにいじめ殺されて満足するものではない。必ずや死に方に付いて種々考究の結果、嶄新な名案を呈出するに違いない。（中略）その自殺者が皆独創的な方法を以てこの世を去るに違いない[66]」と苦沙弥の言うように、“智慧”つまり“真理を明らかにし、悟りを開く働き”（広辞苑 五版）が足りなくて、このまま何も手を打たないで放っておくと、夏目の猫はドイツからの借り物だと世間に風評が立ち、著者はそれに振り回されて、いじめ殺される羽目になる。しかし、著者夏目漱石は“一癖”つまり“扱いにくく油断できない性質”（広辞苑 五版）であるから、何の手段も講じず世間から一方的にいじめ殺されるということはしない。その前に、借り物だと言われた猫の死に方を考える。吾輩の死を以て幕引きを考えている。

神経衰弱の癇癪持ちである苦沙弥殊漱石には、『気焔録』の出現した今、いずれ噂が立つであろうし、又、『吾輩』を継続させるのは中止するより以上に苦しいので、それゆえ吾輩に死んでもらうというのである。もっと詳細に言えば、自殺クラブの自殺志願者のように、くじを引き当てたクラブ会員（夏目）は殺害される対象者として印されているクラブ会員（吾輩）を殺害するという、その結論に、夏目は至った。

そこで、死ぬ方法をあれやこれやと、独創的な死に方を思案しているというものである。苦沙弥の言葉を以てすれば「死に方に付いて種々考究」中なのである。ここでの自殺者は一見猫であるが、猫は著者の分身である。吾輩の水死がなぜ事故死ではなく自殺なのか、あるいは他殺といえるかもしれない［後述］。いずれにせよ、分身の死は著者の死でもある。

さて、吾輩の著者は、吾輩が当日夜半に死ぬ事を黙秘した上で、苦沙弥先生の客人方との大議論によって、舞台を、その場面を賑やかな音に変化させる。談話は別の話題で盛り上がり、その雰囲気の中で、吾輩の終焉は引き延ばされていく。読者の関心を、前述した自殺クラブから引き離すための、作家の手法である。

そして、その賑やかな議論もついに終り、客が一人かえり、二人かえり、口々の「僕

も帰る[67]」で文章の音色が変わる。舞台は回り、寄席がはねたあとのように座敷は淋しくなった[68]。盛り上がった議論では鉤括弧での直接会話調だったのが、「主人は夕飯をすまして書斎に入る。妻君は肌寒の襦袢の襟をかき合せて、洗い晒しの不断着を縫う。小供は枕を並べて寝る。下女は湯に行った。呑気と見える人々も、心の底を叩いて見ると、どこか悲しい音がする[69]」と情景描写に変った。それまでの活気ある愉快な議論の音ではなく、肌寒い冬の日常の音、呑気と見える人の心も叩いてみるとどこか悲しい音がする。そのように、音色も内容もガラリと変った。

そして、ここで初めて、夏目は胸の一物を、吾輩に言わせるかたちで暴露する。「（中略）先達てカーテル・ムルと云う見ず知らずの同族が突然大気焔を揚げたので（中略）吃驚した。（中略）百年前に死んだのだが、不図した好奇心からわざと幽霊になって吾輩を驚かせる為に、遠い冥土から出張したのだそうだ」［脚注23参照］というように、牡猫ムルの大気焔が夏目の胸の一物だった。

心の重荷となっている物を吐き出しこそはしたけれど、吾輩は、何だか気がくさくさして来たので、「（中略）ビールでも飲んでちと景気をつけてやろう[70]」と思った。ビールを口にするのは初めてなので、迷いもあったが、決心がついたのか、「まあどうなるか、運を天に任せて、やっつけると決心して再び舌を出し[71]」吾輩は一杯目を飲み始めた。飲み始めは苦かったビールも飲むにつれ楽になり、一杯目を片付ける頃には、我慢をしなくても飲めるようになったので、「もう大丈夫と二杯目は難なく遣付けた[72]」とある。

何を、やっつけたのか、死ぬ事の不安か、それともくさくさした気分か。一杯目を飲む時は“やっつける”、二杯目を飲んだ時は“遣付けた”という。ビールを飲んで“やっつける”“遣付けた”とは、何をやっつけるのか、遣付けたのか。ビールをやっつけるのか。それとも、その後ろに鎮座する猫文士をやっつけるのか。猫も著者も何も言わない。それに対するこたえを開けているところは、ホフマンの属したロマン派の手法と同じである。

一杯目を終え、二杯目を飲み干し、おまけに盆の上にこぼれたのも拭うが如く腹内に収めてからは、話の展開がはやい。事は一気に運ぶ。

気持ちよく酔っ払って、うっとりしながら吾輩は歩き出した。酒の力を借りての気分は上々だが、はっと云ううち、やられた。“遣付けた”が“やられた”に変った。そして、瞬時に、又もや舞台は変化した。吾輩は、自分でもわけのわからないうちに水の中へ落ちていたのである。

読者に、或は観客に、夏目の猫の顛末をとくと見せるために「我に帰ったときは水に浮いている。（中略）掻くとすぐもぐってしまう。（中略）吾輩は大きな甕の中に落ちている[73]」と現在形での状況説明になった。このスタイルは小説の最後まで続くが、この現在形の中に、著者自身の良心の呵責が凝縮されている。

苦沙弥が自殺について語った「独創的な方法を以てこの世を去るに違いない」［脚注66参照］というのは、吾輩がビールの酔いで甕の中に落ちて水死する、いや水死させることなのか。今様の言葉で言えば、酒帯歩行による水難事故、水死が独創的な死に方というのか。それも日本酒ではなく、ビールを飲んで猫は死ぬ。

猫文士の出現が原因で吾輩を死なせるという、目論見を、読者に見破らせないために、

不意の出来事のように、著者は語っている。気持ちよく酔いが回り、眠気が誘い、愉快になる、しかし足はふらつく。そして、体は意思通りには動かない。「眼はあける積だが重い事夥しい。こうなればそれまでだ。海だろうが、山だろうが驚かないんだと、前足をぐにゃりと前へ出したと思う途端ぼちゃんと音がして、はっと云ううち、――やられた[74]」のは、そのためである。突然の不慮の事故で、大きな甕の中に落ちてしまった吾輩は、甕の中から這い上がろうと、気は焦るが、足は左程役立たなくなる、もがけばもがくほど沈んでいく[75]。

その苦しさの中で吾輩は「こんな呵責に逢うのはつまり甕から上へ上がりたいばかりの願いである。あがりたいのは山々であるが上がれないのは知れ切っている。（中略）あせっても百年の間身を粉にしても出られっこない[76]」と考えた。猫文士の大気焔に反論したいが、弁解の仕様なく、勝ち目もないのは分かり切っている。因みに“百年”は猫文士が自己紹介の時に吾輩に吐いた言葉を指している［脚注15参照］。二度三度はもがかせるが、筋書きは既に決まっているので、結局のところ諦めさせるのもはやい。シナリオ通りモガクのは、モガカセルのは、やめにした。

そして最後の最後に、これまでどうにかして語り手として語ることに徹してきた著者夏目漱石は、猫の吾輩みずからに『もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎり御免蒙るよ[77]』と、喋らせてしまった、それも鉤括弧付けの直接話法の形式で、猫が自分の口から人間の言葉を発している。

この事を、どう解釈すればよいのであろうか。「吾輩は猫である。猫の癖にどうして主人の心中をかく精密に記述し得るかと疑うものがあるかも知れんが、この位の事は猫にとって何でもない。吾輩はこれで読心術を心得ている[78]」という著者の叙述のように、猫が著者の心中を読み取り、精密に記述したということか。

それにしても鉤括弧付けの直接話法形式では説明がつかない。猫文士のように、吾輩は人間の言葉を喋れるようになったのか。とはいえ、読者が、猫が人間語を喋るわけがないというのであれば、これはまさに今ペンを走らせている著者自身の言葉である。

そうなると、漱石の吾輩はホフマンの牡猫ムルの世界を超越している。視覚言語や感覚言語を以て猫が人間社会に入ってくるのがホフマン流であるが、不明瞭であっても著者は語り部としての立ち位置にいる。しかし、漱石流では、著者自身が『吾輩ハ猫デアル』という小説の中に、物語の世界に入ってしまった。それも、猫自身になってしまった。全くもって新世界である。これについては別の機会に論じたい。或いは、吾輩が著者の分身Doppelgängerであるならば（既述）、これについても又の機会に論じてみたい。

さて、吾輩は死ぬ。死んでこの太平を得る。死ななければ太平は得られぬ[79]というように、ムルとの問題を夏目の猫は死ぬ事で解決した。いや夏目の猫を死なせることで著者は問題を解決した。猫は死ななければならなかった、これが猫の決定業である。報いである。死んだからこそ問題は解決した。

とはいえ、これが終わりではない。実の解決は、末尾の“南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏[80]”が示すように他力本願である。南無阿弥陀仏とは阿弥陀仏に帰命するの意（広辞苑五版）であり、これを唱えることで極楽に往生できるという。そして“難有（ありがた）い難有い[81]”

を以て幕引きとしている。“滅多にない”（広辞苑 五版）話であると、言いたいのか。それとも“生存しにくい”（広辞苑 五版）御時世だと、言いたいのであろうか。

いずれにしても、そうなるとやはり猫文士の大気焔がもとで、漱石の吾輩は退散したと考えられる。

六　漱石の自白

1）作品の頁数

現在の『吾輩は猫である』は十一話から成る長編小説である[82]。イギリスから帰国後、当時『ホトトギス』の選者だった高浜虚子に勧められて、漱石は東京帝国大学講師として英文学を講じながら、その雑誌に読切り物として小説を書いた。それが好評につき、続き物となった［脚注４参照］。

吾輩は猫であるで始まる初作は十五頁十三行の短編で、ユーモアに富んで明快である[83]。しかし、生まれた場所が分からぬこと、人間の手で持ち上げられたこと、沢山いた兄弟が一匹もいなくなっていたこと、母親も消えたことなど、そして人間に対して同等あるいはそれ以上の地位にあり、人間社会を風刺する自尊心の強い牡猫の語り口調を聞いていれば、ムルが浮かんでくる。

続投の喜びで始まる[84]第二話は五十四頁と四行というように、初作に比べて三倍強の長さになった。

第三話は元に戻って二十二頁三行、第四話は三十五頁、第五話は三十四頁十七行、第六話は三十三頁二行、第七話は三十五頁、第八話は三十五頁、第九話は三十九頁十三行と、回数に比例して頁数は増えてはいるが、それでも三十頁台に留まっている。

それに比べて、「あなた、もう七時ですよと襖越しに細君が声を掛けた[85]」で始まる第十話は、英語教師である苦沙弥先生の家族紹介が長く五十七頁九行となっている。

しかし、最も頁数が多いのは第十一話で、七十六頁四行もある。この数字は十五頁十三行の初作の五倍である。

なにゆえに、それだけ多くの頁数を漱石は必要としたのか。それを以下に観る。

2）第十一話

迷亭君と独仙君の二人が苦沙弥先生宅で碁をしているところから、第十一話は始まる[86]。その二人が床の間の前で碁の勝ち負けを争っており、座敷の入口には寒月君と東風君が相並んで、その傍で苦沙弥先生が黄色い顔をして座っており、そして、この五人が、何やかんやと自分の事も交えて四方山話をしているというような、そのような取り留めもない話が、七十六頁四行の半分以上も続く。

半分ぐらいが過ぎたところで、「まあ聞きたまえ。苦沙弥先生元来酒は飲めないのだよ[87]」と迷亭君が話を切り出し、苦沙弥先生はビールの徳利に入っている味醂を盗み飲みしておきながら知らぬ顔をしていたが、顔中真赤にはれ上がって、ぶざまな有り様で座っていたので犯人だとバレタことを、またその時苦沙弥先生が下戸だと分かったことをばらしている。“まぁ聞き給え”という穏やかな命令文を以て、読者の関心を引いているのも、

これが、やがて生じる吾輩の水死と深い関係があるからである。

退屈な話は続くが、女性の問題で寒月君が「今時分探偵が十人も二十人もかかって一部始終残らず知れていますよ[88]」と言った時、苦沙弥は急に苦い顔をしただけでなく、「不用意の際に胸中を釣るのが探偵だ。（中略）知らぬ間に口を滑らして人の心を読むのが探偵だ。（中略）おどし文句をいやに並べて人の意志を強いうるのが探偵だ。そんな奴のいう事を聞くと癖になる。決して負けるな[89]」「当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるのが原因になっている[90]」等々、探偵について大議論を始めだしたと、吾輩は主人描写をしている。探偵についてのこの箇所を、読心術を心得ている吾輩のように、著者の心を読む必要はあるが、紙面の都合上またの機会に譲ることにする。

さて、ここ第十一話で、全七十四頁のうち三分の二が経過し、残量が二十六頁になってはじめて、重要な鍵を握る言葉が発せられた。既に五で触れたが、「まあさ。議論だから、黙って聞くがいい。（中略）どうしたら死なずに済むかが問題である。（中略）人間はどうしても死ななければならん事が分明になった[91]」「まあさ。議論だから、だまって聞いていろ。いいかい。どうしても死ななければならん事が分明になった時に第二の問題が起る」［脚注61参照］である。これら二つの文章は両方ともに命令文であるが、先より後のほうが、命令口調がきつい。強い命令口調によって相手に、この場合、読者に何も言わせない、何も質問させないぞという語り手の姿勢が見える。質問されては困るのである。

そして間髪入れずに「どうせ死ぬなら、どうして死んだらよかろう。これは第二の問題である、自殺クラブはこの第二の問題と共に起るべき運命を有している」［脚注63参照］と、死ななければならない理由も言わずに、唐突に、第二の問題として死に方を口外し、読者をそこへ引っ張り込んでいる。苦沙弥の内面世界へと読者は引き込まれる。「死ぬ事は苦しい、然し死ぬ事が出来なければ猶苦しい。神経衰弱の国民には生きている事が死よりも甚しき苦痛である。従って死を苦にする。死ぬのが厭だから苦にするのではない。どうして死ぬのが一番よかろうかと心配するのである。只大抵のものは智慧が足りないから自然のままに放擲して置くうちに、世間がいじめ殺してくれる。然し一と癖あるものは世間からなし崩しにいじめ殺されて満足するものではない。必ずや死に方に付いて種々考究の結果、斬新な名案を呈出するに違いない。だからして世界向後の趨勢は自殺者が増加して、その自殺者が皆独創的な方法を以てこの世を去るに違いない」［脚注64-66参照］という苦沙弥先生の自殺学である。苦沙弥先生殊著者夏目は死に方について色々考え研究中であるが、しかし、世間からいじめ殺される前に死ぬというのである。この自殺学の中へ読者は引っ張り込まれる。

それを聞いて、迷亭先生は「その時分になると落雲館[92]の倫理の先生はこう云うね。（中略）世界の青年として諸君が第一に注意すべき義務は自殺である。しかして己の好むところはこれを人に施して可なる訳だから、自殺を一歩展開して他殺にしてもよろしい。ことに表の窮措大珍野苦沙弥氏の如きものは生きて御座るのが大分苦痛の様に見受けらるるから、一刻も早く殺して進ぜるのが諸君の義務である。尤も昔と違って今日は開明の時節であるから、槍、薙刀もしくは飛道具の類を用いる様な卑怯な振舞をしてはなりません。只あてこすりの高尚なる技術によって、からかい殺すのが本人の為め久徳にもなり、

また諸君の名誉にもなるのであります[93]」と、蘊蓄のある言葉を発している。又、苦沙弥はこの迷亭の言葉に「成程面白い講義をしますね」と同意しているので、吾輩の水死は著者の吾輩殺しであり、自分殺しであるともいえる。

この二人の先生の言葉の中に、『猫文士気焔録』に対する、夏目の身の処し方が描かれている。詳細に言えば、猫文士に追いつめられて逃げ場を失った鼠である珍野苦沙弥つまり夏目は生きているのがつらいので、そこから一秒でも早く解放されたいので、できる限りはやく彼を殺してやるべきだと迷亭は言い、迷亭のその説に苦沙弥は「面白い」と同意しているので、吾輩の著者漱石は、自らをこの苦痛から解放するために、吾輩を殺す。それゆえ、吾輩の水死は不慮の事故ではなく、他殺となる。迷亭先生に言わせてはいるけれど、それは夏目自身の声である。気焔録の出現により、夏目漱石は生きているのが辛いほど苦しいということである。

そして最後のところで『もうよそう。勝手にするがいい。がりがりはこれぎり御免蒙るよ』と、夏目は本音の本音を吐いた。

七　結論

ドイツ文学の世界に生まれたが、祖国ドイツでは不健全な文学という評価によって、その名を馳せることができなかった牡猫ムルは、本国でこそゾンザイに扱われたが、外国では人気を博した。このムルを、吾輩は見ず知らずであると表面上は跳ね返したが、猫文士の口述していないことまでも、ムルの素行を具体的に知っていたのは、見ず知らずではなかったということになる。

吾輩が知っていたのであるから、著者は勿論知っていた。ムルの存在など知らないという振りをしてきたが、第十一話で観察したように、酔っ払っての不慮の事故により、吾輩を殺すこと、溺死させることで、漱石は『猫文士気焔録』で公表されたことに間違いのないことを認めたのである。そのさい素人に少し皮肉を言ってはいるが。「只あてこすりの高尚なる技術によって、からかい殺すのが本人の為め久徳にもなり、また諸君の名誉にもなるのであります」［脚注93参照］を、穿って解釈すれば、高尚なやりかたで、夏目へのあてこすりのために、又からかうために、吾輩に向けられた気焔録は、結果として、夏目の猫を殺すことになり、それがまた著者への久徳となったという夏目金之助の藤代禎輔への皮肉でもあり、本音でもある。

夏目の猫と牡猫ムルには共通点が多くある。丹念に観察していけば、それだけで一研究になるであろう。

しかし、共通点が多くあるとしても、夏目の猫とホフマンの猫は全くもって別物である。ホフマンの猫はホフマンに似て空想力豊かであり、それが行き過ぎて現実と夢の区別が分からなくなるほど瞑想できる。夏目の猫は論理的で一定の距離を置き現実世界をしっかり観察している。英語教師かつ英文学者であり、漢文や俳句や日本の古典文学にも精通した人間と、自分の名前の一つアマデウスをモーツァルトから取ったほどモーツァルト音楽に魅了され、自らも「ウンディーネ」をはじめ数多くの作曲をし、音楽家で成功したかったが成功できなかった法律家との違いである。

夏目の猫は人間社会を風刺はするが、猫の世界から食み出て、人間世界に這い入ってはこない。どこまでも執筆者は夏目漱石であり、猫は夏目の手から離れることはない。語り手の立ち位置がハッキリして揺らぐことはない。ホフマンのカーテル・ムルは、別の話クライスレルが混ざっていることもあり、複雑で、夏目の猫のような断固たる立ち位置はない、明快さはない。しかし夏目の猫には牡猫ムルの豪快さはない。夏目の猫は、ホープの英訳*The educated Cat*のように教育された猫である。素人の言葉を以てすれば、大人し過ぎる。

しかし、五で観察したように、夏目漱石の『吾輩』には最後の最後に、猫が人間の言葉を発したという、どんでん返しがある。あるいは著者が猫になったという、どんでん返しがある。どちらの解釈をすればよいのかを著者が黙秘しているところが、牡猫ムルの著者より、吾輩の著者のほうが上手である。こたえは読者任せである。

ホフマンの牡猫ムルについては、別の機会にじっくり観察してみることにするが、夏目の猫は初めの頃にムルの名前を紹介でもしていたならば、ビールに酔って水死しなくてもよかったのかもしれない。著者 は、分身である愛猫を死に至らしめる必要はなかったかもしれない。

しかしまた『気焔録』が出現したからこそ、吾輩の独創的な死を以て、夏目は処女作を完結できたともいえる。

注

1　日付は1872（明治５）年までは旧暦であるから、日付は違っている。

2　1916（大正５）年５月26日から『朝日新聞』に連載されたが、漱石の病死によって同年12月14日までの188回で未完となった。

3　『吾輩は猫である』夏目漱石著 新潮社 昭和63年 53版 471頁14行.

4　1905年１月に『ホトトギス』に発表され、好評のため1906年８月まで継続した。『ホトトギス』は1897（明治30）年１月15日に正岡子規の友人柳原極堂が創刊した物である。創刊時には雑誌名称はひらがなで『ほとゝぎす』で正岡子規や高濱虚子が選者だった。1898（明治31）年10月に場所を東京に移し、高濱虚子が継承した。1901（明治34）年10月に雑誌名は『ホトゝギス』と変更された。

5　『文化境と自然境』「夏目君の片鱗」藤代素人著 文献書院 大正11年 252頁3-4行.

6　同上257頁 11-12行.

7　『新小説』11巻５号pp.1-12「猫文士気焔録 カーテル、ムル口述　素人筆記」藤代禎輔著 春陽堂 明治39年.

8　Ernst Theodor Amadeus Hoffmann（1776-1822）：ドイツ人作家、作曲家、音楽評論家、画家、法律家。多彩な分野で才能を発揮したが、現在では後期ロマン派を代表する幻想文学の奇才として知られている。本名はErnst Theodor Wilhelm Hoffmannであったが、敬愛する音楽家Wolfgang Amadeus Mozartの Amadeusを自分の名前に取り入れた。

9　『文芸と人生』「猫文士気焔録」藤代禎輔著 不老閣書房 大正３年 356-372頁.

10　二つの話しが混在したので、一冊の長編小説としての標題は*Lebensansichten des Katers Murr nebst frangmentarischer Biographie des Kapelmeisters Johannes Kreisler in zufälligen Makulaturblättern　Herausgegeben von E.T.A.Hoffmann*という途轍もなく長いタイトルである。邦訳すれば『牡猫ムルの人生観―楽長ヨハネス・クライスレルの未完の伝記もいっしょに―偶然に使い古しの紙で　E.T.A.ホフマンによって出版』となる。

11 『文芸と人生』「猫文士気焔録」藤代禎輔著 不老閣書房 大正３年357頁5-7行.
12 同上 357頁7-8行.
13 同上 360頁9-11行：現に吾輩等はチークが紹介してロマンチックの大立物のとなった「長靴をはいた猫」を斯道（しどう）の先祖と仰いで、著書の中で敬意至れり蓋だ。ドイツ語原本では：*Lebensansichten des Katers Murr* : E.T.A.Hoffmann著　Insel Verlag Frankfurt am Main 1975：「E.T.A.Hoffmann Werke Dritter Band」（ホフマン作品集第三巻）中：181頁 25行以下 : ich hatte einen Ahnherrn ……unter dem Namen des gestiefelten Katers.（僕には長靴をはいた牡猫という先祖がいる）。
14 Ludwig Tieck（1773-1853）：ドイツ・ロマン派を代表する作家で詩人でもある。シェークスピアの諸作品をドイツ語訳した。自己作品もまたカーライルによって英訳されている。ゲーテからも高く評価された。初期代表作に*Der gestiefelte Kater*や*Der blonde Eckbert*がある。
15 『文芸と人生』藤代禎輔著「猫文士気焔録」不老閣書房 大正３年360頁 6-8行.
16 同上 360頁５行.
17 同上 360頁11-12行.
18 同上 360頁13行-361頁４行、361頁10行.
19 同上 361頁10-12行.
20 同上 361頁13行-362頁１行.
21 同上 362頁6-7行：（中略）到頭往生して吾輩の口述を筆記することに為った。
22 『吾輩は猫である』夏目漱石著 新潮社 昭和63年 53版 471頁５行.
23 同上 同頁6-9行.
24 漱石が文部省へ提出した最初の報告書が「物価高真ニ生活困難ナリ十五磅（ポンド）ノ留学費ニテハ窮乏ヲ感ズ」と言っているように、官給の学費には問題があった。彼はメレディスやディケンズを熟読した。大学の講義は授業料を「拂ヒ聴ク価値ナシ」として、ユニヴァーシティ・カレッジ・ロンドンの英文学の聴講をやめて、シェークスピア研究家のウィリアム・クレイグ（William James Craig）の個人教授を受けた。英文学研究への違和感がぶり返し、再び神経衰弱に陥った。出典：https://ja.wikipedia.org/wiki/夏目漱石.（2016年11月29日閲覧）。
25 Weltliteratur（世界文学）といっても、当時のWelt（世界）はEuropa（欧州）という意味合いだったのでヨーロッパ文学という意味である。
26 Heinrich von Kleist（1777-1811）：ドイツ人詩人、劇作家、短編作家。
27 Gottfried Keller（1819-1890）：スイス人のドイツ語作家。長編・短編ともにケラーの小説はリアリズムを根底に据えながらもロマン派の味わいがあり、悲劇性とユーモアを兼ね備えている。代表作に自伝的教養小説『Der Grüne Heinrich』（緑のハインリヒ）がある。
28 Teodor Storm（1817-1888）：ドイツの法律家、作家。代表作は『Immensee』（みずうみ）（1849）や『Der Schimmelreiter』（白馬の騎士）（1888）。ドイツ文学では詩的リアリズム（市民的リアリズム）の代表作家の一人。
29 Robert Pierce Gillies（1788-1858）は「German Stories」（ドイツの諸小説）の中で英訳した：*The Devil's Elixiers* や*Mademoiselle de Scudery*.
30 1809年３月にロンドン出版社ジョン・マレイJohn Murray　が創始した文学かつ政治的な定期刊行物。
31 Walter Scott（1771-1832）：スコットランドの詩人、小説家。ロマン主義作家として歴史小説で名声を博した。ゲーテ作品の英訳はじめ（例えば*Götz von Berlichingen*が*Goetz of Berlichingen, with the Iron Hand*、Erlkönigが *The Erl-King*：London 1799というように）、数多くのドイツ文学を英訳、また英文学を独訳している。彼は1827年７月に“On the Supernatural in Fictions componisten, and in Partikular in the work of E.T.A.Hoffmann”（架空の作曲家における超自然現象、そしてホフマン作品における地方分権）と題してForein Qualterly Reviewに公表した：60-98頁。ゲーテは*Gespräche mit Goethe*（エッカーマン著）中（3.Oktober 1828）でWalter Scottを高く評価している。
32 Thomas Carlyle（1795-1881）：19世紀スコットランド人随筆家、歴史家。ドイツ文学に精通して

いた。エディンバラ大学学長（1865-1868年）。著作品としては*Life of Schiller*（シラー伝記）や*Wilhelm Meistera Apprediceship*（ゲーテの*Wilhelm Meisters Wanderjahre*の英訳）等がある。*Meistera Apprediceship*出版時75歳だったゲーテは、*Gespräche mit Goethe*（エッカーマン著）の中でカーライルはドイツ人を熟知しドイツ文学を理解していると褒めている：15. Juli 1827.

33 Alexandre Dumas（1802-1870）：ホフマンの原本の着想・筋書きが全く同じ改作版・翻訳を1844年に出版：Histori d'un casse-noisettte, 1844.

34 Pyotr Ilyich Tchaikovsky（1840-1893）：*Der Nussknacker*（くるみ割り人形）は、E.T.A.Hoffmannの童話*Nußknacker und Mausekönig* から作られたバレエ曲である。

35 John Thomas Bealby（1858-1944）は1885年にホフマンの作品を*Weird Tales*という題で英訳してJOHN C NIMMO社から出版した。

36 Alexander Ewing（1830-1895）：スコットランド人の音楽家、作曲家、翻訳家である。

37 フランスの作曲家ジャック・オッフェンバックの４幕の正式なオペラ（オリジナルは５幕７場）。E.T.A.ホフマンの小説から３つの物語を用いて脚色したジュール・バルビエPaul Jules Barbierとミシェル・カレMichel-Antoine-Florentin Carréの同名の戯曲に基づいて、ジュール・バルビエが台本を書いた。1881年２月。

38 Moncrieff, A. R. Hope（Ascott Robert Hope 1846-1927）：『牡猫ムル』を英訳して1883年にcollction europeanliteraturに発表: 315頁.

39 Edgar Allan Poe（1809-1849）：フランス象徴派にも影響を与えたが、日本でも多くの作家がポーから影響を受けた。日本の探偵小説の基盤を築いた小説家平井太郎（1894-1965）の江戸川乱歩というペンネームはエドガー・アラン・ポーからもじったものである。

40 『文化境と自然境』「夏目君の片鱗」藤代素人著 文献書院 大正11年 258頁9-10行.

41 『吾輩は猫である』夏目漱石著 新潮社 昭和63年 53版 471頁9-13行.

42 *E.T.A.Hoffmann Werke Dritter Band* : *Lebensansichten des Katers Murr* : 165頁33行-166頁８行: E.T.A.Hoffmann Insel Verlag Frankfurt am Main 1975.

43 *Nutcracker And Mouse King And The Educated Cat* By.E.T.A.Hoffmann From The German Translated By Ascott R. Hope: New York Cassell, Publishing Company 1892, Printed by R. & R. CLARK, Edinburgh: 173-198頁.

44 *E.T.A.Hoffmann Werke Dritter Band* : *Lebensansichten des Katers Murr* : 166 頁 36 行 : *Lebensansichten des Katers Murr* : *Lebensansichten des Katers Murr* : E.T.A.Hoffmann Insel Verlag Frankfurt am Main 1975.

45 同上198頁８行.

46 『吾輩は猫である』夏目漱石著 新潮社 昭和63年 53版 471頁12-13行.

47 同上 同頁15-16行.

48 同上 同頁16-17行.

49 同上 同頁17-18行.

50 同上 430頁１行.

51 同上 472頁4-5行.

52 同上 同頁5-6行.

53 同上 同頁6-8行.

54 同上 同頁10-11行.

55 同上 同頁10行.

56 同上 同頁11-13行.

57 同上 同頁5-6行.

58 同上 同頁６行.

59 同上 同頁17行.

60 同上 430頁1-7行：苦沙弥先生元来酒は飲めないのだよ。（中略）一生懸命に飲んだものだから、さあ大変、顔中真赤にはれ上がってね。（中略）それで藤さんが帰って来てビールの徳利をふってみると、半分以上足りない。何でも誰か飲んだに相違ないと云うので見廻して見ると、大将隅

の方に朱泥を練りかためた人形の様にかたくなっていらあね…。
61 同上 449頁1-2行.
62 *The suicide club* : Robert L. Stevenson（1850-1894）著：初版（1878）*London Magazine*。その後 *New Arabian Nights*（新アラビヤ夜話）に所収。自殺志願者の異常心理を描写している。
63 『吾輩は猫である』夏目漱石著 新潮社 昭和63年 53版 449頁4-5行.
64 同上 同頁7-8行.
65 同上 同頁8-9行.
66 同上 同頁9-13行.
67 同上 470頁13行.
68 同上 同頁13-14行.
69 同上 同頁15-17行.
70 同上 471頁17-18行.
71 同上 472頁15行.
72 同上 473頁１行.
73 同上 同頁15-18行.
74 同上 同頁11-13行.
75 同上 474頁4-8行：水から縁までは四寸余もある。足をのばしても届かない。飛び上がっても出られない。呑気にしていれば沈むばかりだ。もがけばがりがりと甕に爪があたるのみで、あたった時は、すこし浮く気味だが、すべれば忽ちぐうっともぐる。もぐれば苦しいから、すぐがりがりをやる。そのうちからだが疲れてくる。気は焦るが、足は左程利かなくなる。遂にはもぐる爲に甕を掻くのか、掻く爲にもぐるのか、自分でもわかりにくくなった。
76 同上 同頁9-10行.
77 同上 同頁16行.
78 同上 340頁7-8行.
79 同上 475頁2-3行.
80 同上 同頁３行.
81 同上 同頁同行.
82 1905年１月にのちの第１章に相当する部分が発表され、その後1905年２月（第２章）、４月（第３章）、５月（第４章）、６月（第５章）、10月（第６章）、1906年１月（第７章・第８章）、３月（第９章）、４月（第10章）、８月（第11章）と掲載された。出典：https://ja.wikipedia.org/wiki/吾輩は猫である（2016年11月29日閲覧）
83 『吾輩ハ猫デアル』の第一話は、著者夏目漱石了承の上で、虚子が手を加えている。
84 『吾輩は猫である』夏目漱石著 新潮社 昭和63年 53版 20頁15行：吾輩は新年来多少有名になったので、猫ながら一寸鼻が高く感ぜられるのは難有(ありがた)い。
85 同上 341頁４行.
86 同上 398頁16行.
87 同上 430頁１行.
88 同上 441頁15-16行.
89 同上 442頁2-6行.
90 同上 443頁5-6行.
91 同上 448頁15-17行.
92 落雲館は、漱石の旧居（旧千駄木町57番地）の裏にあった「郁文館」がモデルである。因みに「落雲館」という単語は『吾輩』において35回も登場するが、第八話が最も多い。
93 『吾輩は猫である』夏目漱石著 新潮社 昭和63年 53版 450頁7-14行.

参考資料

１ 『吾輩は猫である』夏目漱石　新潮社（新潮文庫）1988（昭和63）年３月53版

2 「猫文士気焔録 カーテル・ムル口述　素人筆記」『新小説』11巻５号pp.1-12 （春陽堂） 1906（明治39）年４月発行 マイクロフィッシュ 国会図書館所蔵（請求記号YA5-1017）
3 『文芸と人生』藤代禎輔著「猫文士気焔録」356-372頁 不老閣書房 1914（大正３）年４月15日発行 国立国会図書館デジタルコレクション（請求番号904-Ｆ66ウ）
底本：「猫文士気焔録 カーテル、ムル口述　素人筆記」『新小説』11巻５号pp.1-12　春陽堂 1906（明治39）年４月発行　マイクロフィッシュ　国会図書館所蔵（請求記号YA5-1017）
4 『文化境と自然境』藤代素人著「夏目君の片鱗」248頁-259頁 文献書院 1922（大正11）年10月 国立国会図書館デジタルコレクション（請求番号503-154）
底本：「夏目君の片鱗」『藝文』第８年第２号66頁～74頁　1917（大正６）年２月発行
5 『E.T.A.Hoffmann Werke Dritter Band』（*Lebensansichten des Katers Murr*） E.T.A.Hoffmann Insel Verlag Frankfurt am Main 1975
6 『The Oxford Guide to Literature in English Translation』Peter France OXFORD University Press　2000
7 『THE EDUCATED CAT』*Lebens-Ansichten des Katers Murr*（E.T.A.Hoffman著）の Ascott R.Hopeによる英訳　New York Cassel Publishing Company 1892.
http://ufdc.ufl.edu/UF00081177/00001/182j（2016年11月29日閲覧）